

2. 事業の概要と成果

(1) 上位目標の達成度

本事業の上位目標は「1. ラオス北部地方の障害者の社会進出を促す。2. フアパン県において障害者の新たな就労ロールモデルをつくり、行政と連携しながら北部の障害者就労を活性化する。」であり、2015年10月に事業が開始されて以来、ラオス障害者協会や地元村長との連携の下で研修生を募り、ラオス人及び日本人専門家の指導の下1年間で131名の障害当事者の職業訓練を行い、2016年9月末現在10名が就労、起業を達成する為にOJTによる訓練を重ねている。詳細として、当事業では1年間に計4回の造園・園芸研修を開催し、第1回20名・第2回以降各回10名、合計で60名、計4回の美容研修を開催し、第1回4名・第2回以降各回10名、合計で34名、計4回の製菓研修を開催し、第1回7名・第2回以降各回10名、合計で37名、総計131名のフアパン県を中心とした近隣県も含めた障害者が研修に参加し当会の仮想就労の場でもあるビエンサイの就労支援センターにおいて就労・職業訓練を行った。

当会のOJTを実施する技能ワークショップ（仮想店舗）は「就労意欲の高まった障害者が即戦力となるような社会のニーズに即した仮想店舗を使った「技能訓練」を経て、起業や就労へと進めるよう必要な支援が提供される」場であり、この目的に鑑みて、フアパン県ビエンサイ村に当会のOJTの場である就労支援センターを開設、実際にビジネスを行いながら、就労の意義、高品質のサービスやモノを提供、販売することによってコミュニティとつながり、コミュニティから評価され、障害当事者の自信を醸成するための就労現場として1年目を終えた。この場でビジネスを学び、顧客サービスを学び、顧客のニーズを肌で感じ、ビジネスに必要な基礎知識を学び、自分が起業するために必要な準備をより正確にイメージできるという目的のために事業に関わる全ての関係者が1年目の支援体制を構築した。開設当初、この地が首都ビエンチャンとは異なり、地方都市のさらに小さな村であることから、障害者就労のロールモデルが生まれるには大きな経済的地理的ハンデがあったにも関わらず、ビエンサイ村の支援を受けて、また日本の専門家の起業・就職に必要なあらゆる支援を行いながら、研修生が起業をイメージできるよう丁寧に指導した。

当会就労支援センターでは、第一期目ということで基礎となる各職業訓練のカリキュラム過程をしっかりと反復学習をする形を最重視し、当会就労支援センターにおいて、研修生が技能の向上に努める環境をしっかりと整えた。また、同時に初回技能研修の際に各研修生の就労に向けた具体的な希望を聞き、各自の就職・起業活動に対して当センターの指導スタッフがきめ細やかなアドバイスや支援を行った。また、当団体の日本人現地プロジェクトマネージャーがラオス人スタッフ及び研修生と共に近隣の公共施設、商店や飲食店などを回り、直接マーケティング方法や販売促進方法等の指導も日々の業務で行ってきた。更に市場や商店の軒先を借りて研修生が直接製菓の販売をして製菓販売の実体験を行ったり、センター内の

	美容研修施設で近隣の方々に洗髪や染髪をして日々技術向上に励み、当事業で研修を受けた研修生の多くが就職・起業の道へと確実に進めるようあらゆる既存のリソースを駆使して当事業の上位目標を達成すべく 1 年間努力し、一定の就労の成果を上げた。
(2) 事業内容	2015 年 10 月事業開始 ①造園・園芸研修 (年 4 回) 造園日本人専門家 2 回・園芸日本人専門家 2 回 ②製菓研修 (年 4 回) 製菓日本人専門家 2 回・製菓ラオス人専門家 2 回 ③美容研修 (年 4 回) 美容日本人専門家 2 回・美容ラオス人専門家 2 回 ビエンチャンにてフォローアップビジネス研修 指導員候補生 3 名に向けたビエンチャンでの集中訓練 (初級) 1 回 ④北部近隣県への障害者就労事情調査 (年 2 回) ⑤就労促進セミナー@ビエンサイ郡 (1 回)) フアパン県知事はじめ役所関係者、ビエンサイ郡長、地域における政府関係者、民間企業、教育関係者、地元有力者、村長、LDPA 支部など 35 名を対象に障害者の就労促進と障害者のエンパワメントについてテーマのセミナーを実施 (9 月) ⑥地域ミーティング (村レベル) の実施 (障害者が起業・就労を行っている地域・村への村民理解の醸成) 100 人サポーターを作る。 ビエンサイ郡ビエンサイ村では日本の ODA で実施されている当会の障害者就労支援センターはよく知られる存在となり、村人が頻繁に集まる地域の拠点となっている。またラオス日本桜友好公園も日本とラオスの外交樹立 60 周年を記念して開設された 2 国間の友好のシンボルの公園でもあり、そこに植えられている 300 本を超える桜が当会の障害者により丁寧に管理されていることが、ビエンサイ郡、およびフアパン県知事にもよく理解されており、行政当局、村人からも当会の就労支援センターの活動の意義がよく理解され、また好意的に受け入れられている。申請書にも書いたが、1 年事業が終わり、周辺の地域住民が、最も身近な支援者となり障害者就労の理解者として、また顧客として当事業に貢献していることがそのまま実現した。地域村の住民 100 人サポーター制度が出来上がった。障害のある人、ない人、若者、子供、高齢者すべてのビエンサイ村の住人が、桜公園と当会ワークショップを支援してくれる体制が取れている。引き続き、障害者就労の PR を率先して行ってもらえるよう、また美容やクッキー、造園や園芸の障害者就労の技能訓練の後の障害者の経済自立のサポーターとなってもらえるように 2 年目も働きかける。 ①造園・園芸研修 2015 年 11 月 ・第 1 回造園・第 1 回園芸研修開催 11 月 17 日 研修生 20 名 日本人専門家 造園 1 名・園芸 3 名

研修日の午前中はビエンサイ郡の会議室にて造園・園芸の手法について座学による基礎講座セミナーを実施。

午後から造園チームと園芸チームに分かれて実践セミナーを実施。造園チームは公園にて苗木管理の手法の研修を受講、園芸チームは事務所研修施設にて障害者の収入向上につながる有望な植物、苗木を種類別の座学講義、及びたね木の入手方法と繁殖法、栽培と管理、商品としての仕立て方、売る時期と価格の目安、荷造りなどの園芸ビジネスとしての全体像の把握の座学の後に、実際の花壇作りや花の植え方の手法を実践の形で受講した。特にラオスに生息する土地にあった植物の実生、挿木、接木、取木、株分けの実際技術を専門家から学び、ラオスの土壤に合う苗木の種類や外来種の上手な増やし方も説明を受けた。造園チームは非常にデリケートな苗木管理手法や日本の専門用語に困惑しながらも、苗木管理の重要性を学んだ。

園芸チームも同様に初めて目にする苗木や園芸の技能マニュアルの詳細さに当初は困惑しながらも、園芸作業を通じて、植物や花を愛しみ、世話をすることで植物が大きく育つやりがいと、園芸・造園の作業を通して、日頃障害者が直面する差別や偏見などを通じて心に宿る自己に対する否定的感情を低下させ、植物等を育てることで、肯定的感情が増加する園芸療法の効果が即見られ、継続して係りたいとの障害者も多く、園芸作業への興味の向上、園芸作業に対する肯定的価値付けなどが大いに見られた。専門家の言う事に耳を傾け綺麗な花を咲かせる為の苦労を体感し学んだ。

指導メニューは造園の基礎講座であり、ラオス日本外交樹立60周年記念に植樹された桜の木のメンテナンスも含むラオス日本桜友好公園における造園技術のデザインと苗木のメンテナンス技能習得であり京都の造園の専門家によって行われた。また、園芸を通じた障害者のエンパワメント及びカウンセリング実施のための初級技能講座も併せて行われた。

2016年2月

・第2回造園研修開催 2月9日～2月11日（3日間）

研修生10名 日本人専門家 2名

公園にて苗木の植え方や初期の管理手法の実践研修を実施。

2月は植え込み苗の芽が一番動く季節であることから、丁寧な苗木の養生の仕方を専門家から学んだ。苗木を植える植え穴の準備方法や植え穴を準備する重要性や初期段階での苗木管理の指導を受けるも、専門用語に戸惑っていた様子であった。しかし、熱心な専門家の説明に徐々に理解を示し、造園整備の最終日には研修生達が自ら指導を受けた事項を実践していたのには驚いた。桜の生育もよく、春の開花が待ち遠しいと研修生も心を弾ませていた。桜守の障害当事者である研修生とビエンサイ郡や近隣住民と一緒に協力しながら桜を始め造園研修の場でもある「ラオ日桜友好公園」の管理も皆が一体となって公園造園を支えていく官民挙げての連携が構築されたことは大きな成果である。

2016年7月

・第2回園芸研修開催7月29日～4日

研修生10名 日本人専門家 2名

実際にビジネスで販売できるような苗木の繁殖、栽培技能を講義も含めて実践でも指導を受けた。

◆ビジネス栽培技能

障害者の収入向上につながる有望な植物、苗木を種類別に、たね木の入手方法と繁殖法、栽培と管理、商品としての仕立て方、売る時期と価格の目安、荷造りなど、どのように栽培し出荷するかという一連のビジネスを座学で学んだ。

◆最新の繁殖技術の習得

自分で増やした植物を仕立ててどのように販売するかをイメージ図で指導。実生、挿木、接木、取木、株分けの実際技術を学び、ラオスの土壌に合う苗木の上手な増やし方を学んだ。

◆ケミカル・コントロールの技能習得

商品価値を高めるケミカル・コントロール（化学処理）技能

◆苗木のメンテナンスと庭園作り

顧客に求められるような育成方法の習得。また苗木を植え込む時の色合や見せる庭園づくりとラオスで生息する土地の苗木を使ったガーデニング作りの基礎を学習。

庭の入り口から見てどの部分が目立つのかを考え、目立つ部分には華やかな花を植えると全体が華やかに見える等のガーデニングの基本的な技術を専門家から学び、研修生達は各々どこに何を植えれば良いかを考えながら慣れない手付きで穴を掘り専門家の指導の元で花を植えた。またサンプルガーデンを作り、魅力あるガーデニングを近隣の人々にも披露し、苗木を育て、繁殖し、花々を植え、庭を美しく飾ることで多くの見学者がサムヌアからも訪れることもあり、基礎を習得した研修員が今後県都のサムヌアのレストランやホテルでサンプルガーデニングの無料提供（PR用）を行いFBなども駆使しながら顧客が獲得できるよう計画している。2年目は実際に苗木販売やガーデニングデザインのお披露目を商業化にもつなげられるように発展させていくことが課題であり専門家とビジネス化のプランニングも開始した。

②製菓研修

2016年1月

・第1回製菓研修（ラオス人）開催 1月15日～18日

研修生7名 ラオス人専門家 1名

専門家としてビエンチャンでの当会のN連事業の指導員候補生を招き、製菓作成の技術を移譲。初日は研修生に対し衛生面や品質管理等の重要性や基本的な製菓の作り方を説明。午前中に指導員候補生は日ごろ実践している品質管理等の内容を研修生に丁寧に説明し重要性を細かく指導した。午後から基本的な製菓作成の行程を研修生に披露し、各手順のやり方や注意事項を指導した。

二日目からは各研修生に個別に実践指導し製菓作成の基本的な技術を反復練習しながら移譲した。研修生達は初めて行う製菓作りに手惑いながらも何度か実践して行くうちに手捌きも慣れて来た様に見て取れた。4日間の研修を通して、研修生は製菓作りの楽しさを体感し、完成品を試食しながら「セーブライ（美味しい）」と喜んでいった。ビエンサイのラオス日本桜友好公園開園の記念として「ADDP 桜クッキー」を開発することに成功し、研修生も故郷のフアパン県発信の新しいクッキーブランドに誇りを持ち、今後は指導員候補生としてしっかりと当ワークショップで研修を続けることを確認している。（現在顧客からの受注も少しずつ出てきている）。

2016年6月

・第1回製菓研修（日本人）開催 5月29日～3日

研修生10名 日本人専門家 1名

日本人専門家による初の製菓研修。

研修生達はみな日本人専門家の手捌きを見て日本の技術に驚きながらも、前回のラオス人専門家との違いを学び、各々の技術向上へ役立つ情報を細かく記録していた。プロジェクトのキーワードでもある「桜」をイメージした「桜クッキー」の味や色合い等の最終調整を日本人専門家にしてもらい、その技術を研修生達に伝授して貰った。またいろいろなレシピにも挑戦しており応用技能も向上している。

2016年9月

・第2回製菓研修（ラオス人）開催 9月20日～25日

研修生10名 ラオス人専門家1名

今回は日本人専門家とラオス人専門家による同時研修により、それぞれの専門家の技術等の違いを目の前で確認する研修とした。

それにより、日本とラオスの品質管理等に対する意識の違いを研修生達に学び取って貰う事が今回の研修の重要事項となる。

日本人専門家研修に先立ってラオス人専門家による製菓製造手順とラオス流の品質管理手法を研修生達に再確認した。

・第2回製菓研修（日本人）開催 9月23日～28日

研修生10名 日本人専門家 1名

先に確認したラオス人専門家の手順と品質管理手法と日本人専門家の手順と品質管理手法との違いを研修生達が自ら確認をし、何がどう違うのかを学び取らせた。研修生達はラオスでは当たり前のもでも、日本の品質管理手法ではNGとなる部分が多く戸惑っていたが、2年目の中級へ進むには習得すべき事項で有る事を十分に理解させ、一定した品質の物を作る必要性を学ばせた。現在桜クッキーは3種類、またケーキなどにも挑戦しており、ビエンチャンの先行案件と同レベルの品質を確保できるまでの技術が備わってきた。ビエンチャン事業で成功したクッキー事業の姉妹ブランドのような形で、相乗効果でフアパン事業でも桜クッキーがブランドとして定着

するようにマーケティングやPR も行っていき、数社のラオス企業にも働きかけを始めている。

③美容研修

2016年3月

・第1回美容研修（ラオス人）開催 3月1日～6日

研修生4名 ラオス人専門家 1名

ビエンチャンでの当会のN連事業でしっかりと技術が委譲され、フアパン県サムヌアで自立して美容サロンを営んでいるラオス人技能指導員による第1回美容研修を開催した。

美容研修の講師は難聴の講師で障害当事者であるが、発声による指導を試み、丁寧に初心者の障害女性研修生にシャンプーの基本技術の反復と衛生指導、美容院用具の説明など、自分が日本人専門家から指導された技能をしっかりと指導しているところに大きな成長とラオス人によるラオス人の技能移転がしっかりと持続可能な形で実施されていることに本事業のビエンチャン及びフアパンの連携の大きな成果が見て取れた。初級研修ということで、まだカット、カラー、縮毛矯正などは高度な技術であるが、基本技術を徹底的に反復メソッドにより実践指導がなされた。

次回は顧客を混ぜながらの更なる顧客に対応した接客やサービスの提供を学ぶ予定である。生き活きと新しい技能に若い研修生はエンパワーされた。4名が起業を目指し、これからも研修を継続することで合意した。

2016年5月

・第1回美容研修（日本人）

第2回美容研修（ラオス人）開催 5月17日～22日

研修生10名 日本人専門家 1名 ラオス人専門家1名

美容研修も日本人専門家とラオス人専門家の同時研修を実施する事により、日本流とラオス流の洗髪等の技術の違いを目の前で比較し検討する事が出来た。研修生達は、先の研修でラオス流を学んだが、日本流の洗髪とは大きな違いは無いが、細かい部分が違う事に戸惑いながらも両方の良い部分を取り入れた技術を習得する意義を理解し学んだ。少し応用も含め、カット技術やカラー方法なども学んだ。また日本流の洗髪の特性と丁寧なサービスを村人や県庁のあるサムヌアにも顧客を広げるための工夫したマーケティング方法や広報の仕方など顧客を獲得するためのサービスマーケティング法も少しずつ学習している。OJTとして広く村人が、延べ58人が参加し、障害による美容施術を体験してもらった。中にはOJT期間で施術のコストを払ってきてくれる常連の顧客もあり、障害者が営む美容院として村で認知されてきている。

2016年7月

・第2回美容研修開催 7月29日～3日

研修生10名 日本人専門家 1名

研修生達が習得した日本流とラオス流の合成技術の習得状況を日本人専門家に確認して貰い、修正部分を指導して貰った。

また、散髪技術を日本人専門家に披露して貰い、研修生達は今まで触れた事の無い散髪を自分たちが学ぶ事への期待で目を輝かせて日本人専門家の実技披露を食い入るように見ていた。

散髪（カット）は一朝一夕で習得出来る技術では無いので、まずは基礎をしっかりと固め2年目以降も継続して技能向上を達成するべく少しずつ習得するプログラムと位置づける。通年で0JT 訓練期間とし、日々技能を高める努力をした（通年）

2016年9月

・ ビエンチャンにおける実習開催 9月9日～17日（8日間）

指導者候補研修生3名 日本人専門家1名

ビエンチャンにおいて第3回ラオスファッションウィークが開催された。ラオスのファッション業界の中心となるデザイナーや国際的に活躍する近隣国からのプロデザイナーが集結したコレクションの大きなショーがビエンチャンのセッタパレスホテル、ビエンチャンセンター、ランドマークホテルにて開催された。その男女総勢60名のファッションモデルのヘアアレンジを連日、ショーの前に当会ADDP美容サロンが担うこととなり、この素晴らしい0JTの場にフアパンの当会の美容チームも研修として参加、実際にモデルのヘアアレンジをビエンチャンの美容チームと共にその任を担った。失敗が許されない緊張感の中、ビエンチャンの美容チームにも指導を受けながら、今までの1年の練習の成果を披露することともなり、はじめは戸惑いながらも周りからの指導もあり、懸命に櫛とピンとゴムを使い分けながら、てきぱきとモデルの頭を仕上げていく姿に大きな成長を感じ、やり遂げた後、研修生にとっても大きな自信と励みとなった。ビエンチャンのADDP美容サロンの指導者とも連携し、これからはビエンチャンADDP美容サロンとの連携を行いながらフアパンの研修生の技術の向上に努めていきたい。

④北部近隣県への障害者就労事情調査

2015年11月

・ フアパン県西部の障害者状況調査 11月18日～19日

代表同行でフアパン県西部の障害者状況を調査。

フアパン県西部の幹線道沿いの村で寝たきりの障害者宅を訪問し、話を聞くと現在20歳で子供の頃に病気になり治療費等の支払いが困難なため放置されていたらしく、現在は自力でトイレに行く事も出来ないくらいの重度障害者となってしまった。途上国の貧困が生む弊害での障害者も数多く存在し、フアパン県における障害者就労支援プロジェクトの紹介を行い、本人も重度障害者ではあるが、自立して生きることが出来る希望がこの北部にも存在することがわかり大いにエンパワーされたように感じる。村長に障害者状況をインタビューし、当会の障害者就労支援プログラムのパンフレットを配

り研修生募集の情報提供を行った。また、幹線道から北へ向かった小さな町でビエンチャンのシークッドで勉強したが故郷に戻っても勉強した事が役に立たず細々とテレビの修理をしている青年宅を訪問し話を聞いたが、シークッドは一度卒業すると学科を変えて再度入学する事が困難らしく、本人は奨学金制度の様な制度があれば利用してもう一度役に立つ勉強をしたいと言っていた。

障害者就労支援の施設を卒業しても自立が困難なラオスの状況に触れ、改めて障害者就労支援活動の重要性を認識した。フアパン県にも統計には表れないまでも UX0 の被害者や多くの先天性の障害者があり、支援との接点が全くない障害者も数多いことがわかり、当会の事業の意義がこのような障害者に向けて試されることを改めて感じた。5名の研修員候補の開拓を行うことができた。

2016年2月

・シェンクワン県の障害者状況調査 2月24日～26日

初日の午前中に社会労働省シェンクワン支庁、ラオス障害者協会シェンクワン支部 (LDPA) を訪問し行政側で把握しているシェンクワン県内の障害者状況を調査。午後からシェンクワン中心部の障害者用の施設を案内してもらい視察した。障害者用の施設と言っても、健常者の施設と兼用で有ったり、まだまだシェンクワンの障害者用施設は不十分で有と感じた。2日目は LDPA 職員の案内により中心部から車で2時間くらい移動した過疎の障害者在住の村をいくつか訪問した。

そこには登録をしていない障害者も存在しており、ラオスでの全障害者状況の把握の難しさを痛感した。同時に、過疎の村と言っても農業が中心のいわゆる農村であり、ある障害者は村の中だけで日常生活がほぼ完結しており、障害当事者も孤立しているわけではなく、村人、家族が共に支え合えながら仲良く楽しそうに農業をしていた。軽度の障害を持つ人は村を出て近くの大きな街で仕事をして親に仕送りをしたりしているのを耳にしていたので、村に残っている理由を聞いてみると家庭の事情で残っている人が多く、はたしてその障害当事者にビエンサイの施設での職業訓練に参加させたり他の街で就労させたりということの意義を考えさせられた。

しかし、多くの場合、まだまだ障害者は地方に行けば行くほど差別や偏見の対象であり、自立を阻まれる要因が多くあることは確かであり、引き続き障害当事者が家族の庇護の下ではなく、自立し社会に参加できるための就労や職業訓練の可能性を示し、希望する障害者を募り、社会自立につなげていきたい。

2016年6月

・ルアンパバン県の障害者状況調査 6月15日～17日

ラオス北部の県の一つで有るルアンパバン県の障害者状況調査を実施した。市内中心部には家庭の事情で就学出来ない子供達の為に勉強やラオス伝統芸能(ダンス等)を教えるボランティア施設が有り、

	障害の有無と問わず希望者を受け入れているとの説明を受けた。障害児（10 歳から 18 歳）が数名おり、今後も障害者が増えると言っている。なので当会の事業説明を行い、希望する生徒に当会の職業訓練となるためにリソースとしてこれからもしっかりと連絡を取っていくこととなった。しかし、この施設は全寮制では無いので、通学可能な児童となると遠方からの参加は難しく、児童の大半は市内近郊の子供達だと言っていた。シークッド障害者職業訓練学校のルアンパバン分校を訪問したが、場所が悪く通える障害者が少ない為、健常者向けの英語教室等も実施しているとの事であった。ビエンチャン校の様に広大な敷地に寮を備えた完全寮制と言うシステムでは無いので、本来の支援対象で有る貧困層の障害者が通学を断念してしまう家庭が多いとの事で有った。さらにルアンパバン LDPA 支部にも出かけ障害者就労支援のリソースのないルアンパバンでも当会事業を起点に障害者の社会自立のための職業訓練のオプションを拡げるために当会の事業を連携することを強く要望し、LDPA 支部も大変興味を持ち積極的に障害当事者で就労意欲のある若者とつなげることを約束してくれた。当会の当初の希望であった北部での障害者の就労支援のリソースのハブとなるべく、フアパン県の当会事業が北部ラオスの重要な障害者の社会自立を達成するためのリソースセンターとしてその役割を担うことが、上記シェンクワンとルアンパバンの出張により明確になり、今後も北部の障害者の社会自立のための就労センターとしてしっかりと LDPA 支部と協力しながらネットワークを広げていきたいと考える。またルアンパバンは商業的にも可能性を秘めた県であり、世界遺産の街でもあることから地理的にも近いフアパンの当会事業をルアンパバンで展開したいと考えており、今後もカフェはレストランとの連携を深めていく予定である。
(3) 達成された効果	造園・園芸、製菓、美容のそれぞれのプログラムで初級の技術を学び、OJT を通じて研修生自身が自立する為に今後どの技術を習得したいかを考えるようになった。まだ 1 年目ということで 1 年目に目指した基礎カリキュラムの完全習得は 70%にとどまり、今後は 2 年目となり、1 年目で達成された各部門の基礎能力の習得を更に反復し、応用力も深めながら 2 年目のレベルアップを目指したい。また、新規の OJT 研修生の募集はなかなか人が集まらないことが予測されるが、引き続き、LDPA 支部と連携しながら、また他のリソース（シークッドや他の外国 NGO 事業との連携）ともつながりながら、必要としている障害者にしっかりと当会の活動が届くように広報にも力を入れる。また達成された効果として、研修生自身が複数の技術を同時に習得出来る環境にもなっており、例えば「造園と製菓」と言う様に数種の技術を混合させた自立の可能性もあるため、研修生は一つのプログラムに捉われる事無く、どのプログラムが自分に向いているか、また楽しく技術習得出来るかを自身で考え将来への希望を持って日々 OJT で技術向上のために邁進していることは、可能性を広げることが出来るため本事業の各部門が連携しながら事業

	を進めている。 ・第1回造園・第1回園芸研修生の20名のうち4名がワークショップでの研修を希望しOJTを継続している。 ・フアパン県障害者状況調査の時に話を聞いた青年の障害者が製菓OJTの販売補助（印刷物等）として製菓研修への参加を希望し現在OJTの研修生として活躍している。 ・造園ワークショップは現在主に公園の苗木の初期管理でOJTを継続実施している。先日1本の苗木に花が咲き苗木を育てる喜びを感じていた。 ・製菓ワークショップは現在販売可能な製品作りのために製菓の大きさや形、パッケージの方法、コスト計算による販売価格の模索等でOJTを継続実施し、研修生が増えるまでの間にベースを作る事に奮闘している。
(4) 持続発展性	事業当初から製菓OJTで日々技術習得をしている研修生を指導員候補生として更なる技術向上と指導員としての資質習得に向け支援およびサポートを継続していく。サムヌアで製菓販売に協力してくれている飲食店が数店舗では有るが今後の店舗展開に意欲を示しており、パンや製菓を扱いたいとの事で、研修生が習得した技術を店舗展開に生かして行きたいとの要望もあり、OJTで技術を習得した研修生の就労の場が増える可能性も出ている。フアパン県だけをターゲットにしていると制限と限界もあるためにフアパン県に隣接したルアンパン県やシェンクワン県もターゲット県に含みながら、またフアパン県の全面的な支援も確約してもらっていることから、今後観光県としてフアパン県が大きく発展する鍵は国際空港の完成と観光業（ビエンサイや南の温泉が出る地域の観光インフラの整備）の発展が約束されている今、その観光業の発展に当会の障害者就労事業がうまく連動することが持続発展のかぎと考えるためにいろいろなリソースと当会の事業を今後も繋げていくことが課題となっている。 本事業の持続継続性の担保は、フアパン県内で技能訓練3業種それぞれにラオス人の技能訓練指導員が養成されることが重要であり、その現在各業種で指導員候補が生まれているが、その候補生がしっかりモチベーションを保ち訓練を継続し、今後の将来の障害を持つフアパン県の技能訓練研修生にしっかりと技能を継承するべく続けて研修を受けられるような体制を2年目もとる。3年を終えて技能及び経済的にも自立発展を遂げた当会ワークショップの指導員候補生が、しっかりとフアパン県に根付き、新規研修生を受け入れることが可能になるために、2年目からは特にカウターパートであるフアパン県の理解と協力を得つつ、県が主体の今後の公共事業や民間の造園や園芸を伴う大規模工事に、積極的に参画できるような要望を、フアパン知事にも行っていく。また、フアパン県で、ラオス北部を牽引するような障害当事者の就労成功のロールモデルを作り、ラオスの障害者就労機会が都市部と地方で格差なく平等に生まれる

	よう、障害者就労起業促進セミナーなどの開催を通じて、フアパン 県の行政と連携しつつ、国の施策につながるよう引き続き努力する。
--	---